

浦賀文化

第86号

令和8年7月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀奉行所とヘダ号



君沢形船の図（個人蔵）

こうして帰る手段を失ったプチャーチン一行は幕府から許可を得て戸田浦で代船を建造することになった。安政元年（一八五四年）二月二日に日露和親条約が締結され、その三日後の二四日から戸田浦で日本人と協力して船の建造が開始された。翌年三月に完成したこの船はスクーナーと呼ばれる形の船で建造地にちなんでヘダ号と名付けられた。

ヘダ号が完成したころ、浦賀奉行所では日本初の洋式軍艦鳳凰丸を完成させ、品川沖で見分を受けている最中だった。戸田でロシア人たちが船を建造したという報せを受けた浦賀奉行土岐朝昌は与力の中島三郎助・佐々倉桐太郎の両名を戸田に派遣することにした。命を受けた中島と佐々倉は三月一五日に戸田に向けて出立し、三月一九日に到着したが、ヘダ号は進水式、乗り試しを終えて一八日にロシアに向けてすでに出発してしまっていた。鳳凰丸の見分からはほとんど休む間もなく戸田にやってきた中島はこれまでの疲れがどつと出て茫然とするほど落胆したが、幸運にも出発したはず

の船が戻ってきたのでこれ幸いと見分をすることができたという。この時の様子は中島による日記である「南豆紀行」に記されているが、これをみるとヘダ号の名前の由来などのほか、小銃の各部名称のロシア語、ロシア語の打方号令などロシアの軍事知識や情報をオランダ通詞本木昌造から聞くなどして、食欲に吸収しようとしている様子がうかがえる。このヘダ号の見分で得られた知識や情報がどのようにに活用されたかはわからないが、後に浦賀で幕府所有の艦船を修復する時などに役立てられたのかもしれない。

プチャーチン一行がヘダ号で帰国した後、日本でヘダ号と同型の船が建造された。これらの船は「君沢形」と名付けられ、まず安政二年（一八五五年）二月に六隻が建造された。完成した船は六隻とも江戸に送られたが、その途中で浦賀にも寄港して改めを受けており、この時の君沢形を描いたと思われる絵図が残されている。その後も君沢形は幕府により運用されていて安政四年、五年と二回ほど浦賀に修理・補給のため寄港している記録がある。この時にも、中島の見分の経験が役に立った

かもしれない。

さて、君沢形の原型となったヘダ号はというと、代船ではあるが後に幕府に返還されている。安政三年（一八五六年）一〇月、日露和親条約批准のために下田に渡来したポシエートが曳航してきたスクーナー船がその船である。この船はきれいに外装・内装を眺められていて、ディアナ号に搭載されていた船具や大砲などとともに幕府に贈られた。その後、この船は安政四年（一八五七年）五月に下田から江戸に送られたが、回送にあたって下田で船の操船をロシア人から学んだ者たちがいた。そのうちの一人である今西宏蔵は、元浦賀奉行所同心であった。彼は、下田奉行所開設にあたって浦賀奉行所から転任した役人で、後に神奈川奉行所でも御船掛となつた人物である。

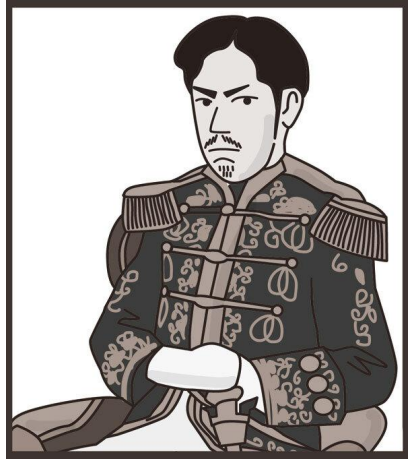
ヘダ号は伊豆で建造された船でありながら、浦賀奉行所と妙な縁のある船だったといえよう。（山本 慧）

★参考文献・史料

- ・「幕末期軍事技術の基盤形成」神谷大介著（岩田書院二〇一三年）
- ・「ヘダ号の建造―幕末期における―」（戸田村教育委員会、一九七九年）
- ・「中島三郎助文書」中島義生著（一九九六年）
- ・「新横須賀市史」資料編（近世Ⅱ）
- ・「大日本古文書 幕末外国関係文書十八」

明治天皇行幸（前編）

— 観音崎砲台並びに横須賀造船所天覧 —



観音崎砲台建設の重要性を示す出来事の一つとして、明治天皇の行幸があります。

明治天皇が軍艦の進水式などに際して横須賀へたびたび行幸されていたことは、よく知られています。最初の行幸は、明治四年十一月二日から二泊三日の日程で行われた、横須賀造船所天覧のためのものでした。この行幸は、天皇が東京へ遷られた後、政府首脳を伴って近代産業の礎となる造船所を視察したという、初の能動的な地方巡幸でした。それまでの儀礼的な移動とは異なる、実質的な「行幸」の先駆けとされています。これ以降、明治天皇は横須賀方面へ一七回もの行幸を重ねられています。

さて、本題である観音崎砲台への行幸です。それは明治一四年五月一日から一九日にかけての一泊二日の日程

で行われ、観音崎砲台と横須賀造船所の二か所を訪問されています。観音崎砲台では、明治一三年五月に建設工事が始まっており、この時はちょうど着工から一年が経過した頃で、工事はなお進行中でした。そして、この行幸の主目的は観音崎砲台の視察にあつたようです。これは、宮内省が編纂した『明治天皇紀』の記述からも読み取ることができます。

行幸の理由を記した部分を現代語訳してみます。

「明治維新以来、陸海軍の制度は徐々に整備されてきたが、海岸防備については、いまだ十分な備えがなかった。そこで、最も重要な地点を選んで砲台を建設することとした。しかし、陸軍省予算の残余を工費に充てなければならぬほど国家財政は厳しく、一度に全ての工事を始めることはできなかった。そのため、まず最重要である東京湾防衛から着手し、湾口に位置する観音崎砲台の工事がよくやく半ばまで進んだ時点で、その状況を天皇陛下にご覧いただき、あわせて横須賀海軍造船所なども視察していただくことを考えたのである。」

このように、砲台建設が、天皇の行幸を仰ぐほど国家にとって重要な事業であつたことが分かります。では、実際の行幸はどのように行わ

れたのでしょうか。当時の文献や資料をもとに見ていきます。

まず、宮内省が示した行程（当時は「御順序」と呼ばれました）は次の通りです。

（五月一八日）

午前七時三〇分ご出門。八時一五分、新橋駅から汽車に乘車。東海鎮守府で休憩後、直ちに迅鯨艦へ乗艦し、午前一〇時出航。航行中に富津洲を遠望。正午、艦内で昼食。午後一時、浦賀に上陸して小休。その後、浦賀から乗馬で観音崎砲台へ向かい、午後三時頃に当地で小休止、海軍射的を見学。さらに鴨居で小休した後、横須賀に到着し宿泊。

（五月一九日）

午前七時、行在所をご出門。造船所内の船具所、鍊鉄所、鑄造所をはじめ、船台で建造中の海門や水雷艇を見学。その後、新波止場で水雷火を視察し、新築の船渠を見学。庁舎で小休した後、端船で迅鯨艦へ乗艦し、直ちに出航。正午に東海鎮守府へ到着し昼食。午後二時の汽車で東京へ還幸。

この行程に基づき、関係諸機関は、失礼や滞りが無いよう万全の準備を整えました。

四月二八日には、宮内省・陸軍省・海軍省・神奈川県担当による行程の下見が行われています。陸軍は、行幸の主目的である砲台建設現場での対応準備を担当し、海軍は、往路の航行および二日目の横須賀造船所での対応に向けて、準備を進めました。また、

沿道の町村でも、それぞれ奉迎の準備が進められるなど、関係機関は総力を挙げて行幸に備えていたのです。

今回は、この歴史的な行幸の詳細をご紹介します。

（デビット佐藤）

笑話一題

日の光が粒になつてきらきらと降り注ぐ頃、知人から「だんごうお」を見に来ないかと誘われ、観音崎自然博物館を訪ねてみることにしました。だんごうお？どんな魚だろうか？想像はできません。水族館によく通うが見たことも聞いたこともない魚です。早速ご対面したその魚は、想像より遥かに小さく、大豆ひと粒分の大きさしかありません。その名の通り、おだんごのようにまん丸で、小さな体でヒレを小刻みに一生懸命動かす姿は、とても愛らしく、私に元気を与えてくれました。

私は身体が不自由になり、何かと動作のおぼつかない生活を、もう十年も送っております。だんご魚はまん丸で、決して泳ぎやすい身体をしていません。でも、必死で泳いでいました。どのくらい見つめていたでしょう。水槽の中の水流にも果敢に抵抗し、時にお腹に付いた吸盤でしっかりと踏ん張る姿を、時が経つのも忘れて応援していました。だんご魚は暑さに弱く、夏を乗り切ることが出来ないそうです。

君がいるから私も頑張れる。気張らずに強い意志を持って生きていけたら。そう思わせてくれた光の眩しい春の日でした。

愛嬌のあるこの魚、是非いち度会いに行ってみては？

（m & m）

